

小学生のうちに読みたい本158冊／くわばたりえさんと考えるリビング学習

ウィズキッズ春号

AERA with Kids

2019 春号
増大号
特別定価980円

新学期
大特集!



小学生のうちに 読みたい本

158冊



ピリギャル・坪田信貴先生の
わが子の才能を伸ばす勉強法

今だから話せるわが家の中学受験

ジャガー横田×木下博勝夫妻



Book in Book
本の専門家に
選ばれた
イチオシの本

新小1 学びの未来予想図

安浪京子×おおとしまさ
「中学受験するメリット
しないメリット」

大人の学び直しの
すすめ

家庭の防災知識
アップデート



くわばたりえさんと考える
リビング学習

今回のゲストは、学問の世界に新たな風を吹かせている時の人、西條剛央さんです。「本質行動学」というあらゆる事象に共通する新しい学問を提唱し、その実践の場として「エッセンシャル・マネジメント・スクール(EMS)」を立ち上げました。高濱さんも発起人の一人です。

花まる学習会代表 高濱正伸の

花まる TALK

連載

03

TALK

「本質」を見抜ける 子を育てよう

形式的なことにまどわされない

TALK

「本質」は学校では
教えてくれない



高濱 最初に西條さんの提唱する「本質行動学」について教えてください。

西條 本質行動学は、これまで学校では教えてくれることのなかつた新しい学問です。「本質大学」や「本質学部」ってありますね。「本質」とは、あらゆる物事に共通して有効で、役に立つものです。

逆に言うと、これを見失ってしまうとすべてがうまくいかなくなるものもあります。

高濱 本質の対極にあるのが、「形式」。

西條 はい。形式とは、手続きや手段、

数字やデータなど、とてもわかりやすいもの、目に見えるものです。学校も企業も、もしかしたら家庭でも、本質よりも形式にものすごく時間をとられてしまつているのが今の世の中です。

高濱 手段や数字が目的化してしまうんですね。小学校ならテストとか平均点とか偏差値。大学の研究なら論文の数、

会社なら会議、社会でいえばルール……。

西條 はい。でも仙台出身で、あの震災で伯父を亡くしましたし、また、原発事故も起こった上で、とにかく未曾有の事態に何かしなければという思いで動きました。このプロジェクトの目的は、被災者支援ではなく、被災された方々の自立支援で、そのためには必要なことを状況とえる現実的なものもある。

西條 そうです。本質行動学とは、基礎研究と実践を合わせたものであって、決して観念的ではなく、むしろ実際に役に立つものです。私が2011年に立ち上げた「ふんばろう東日本支援プロジェクト」は、本質行動学の理念に従つてのチー

ム作りや組織行動でした。支援物資は余っているのに本当に必要な場所に届いていないといった膠着化した状況の打破から始めて、被災者が自立できるために本当に必要な支援は何か、そのためにはどうすればいいかを、みんなで建設的なアイデアや提案を出し合つて動きました。

高濱 あれは本当に画期的でしたね。西條さんは、それまでボランティアの経験になっていた。あのころの自分にそうじやないって言つてやりたい（笑）。

高濱 同じことを私は野球部で（笑）。

西條 でも高濱さんは、今や典型的な本質行動学者ですよ。先日の講演会での公園の話、本質と形式についてのすごい例だと思いました。

高濱 ああ、公園の話。そう、公園は、そもそも子どもが遊びのびのびと遊べるパラダイスであつて、それが公園の本質です。なのに今の公園は、子どもがしてはいけないルールがたくさんある場所になつて

「「本質」は、目に見えません
でも、あらゆる物事に
共通し、役に立つものです」

（西條）

ゲスト
西條剛央さん

早稲田大学大学院
客員准教授

早稲田大学大学院客員准教授
西條剛央（さいじょう・たけお）さん
1974年仙台市生まれ。早稲田大学人間科学部卒、同大学院で博士号。早稲田大学大学院で教鞭を執る傍ら、東日本大震災後の2011年4月「ふんばろう東日本支援プロジェクト」を立ち上げ、日本最大級の総合支援プロジェクトに成長させた。「本質行動学アカデメイア」の代表として「エッセンシャル・マネジメント・スクール」も主宰。



てくれたみんなが報われてちょうどよかったです。

高濱 私が西條さんに共感したのは、本質とは何かを学問的に体系化できれば、子育てや教育も大きく改革できると思ったからです。教育の現場って決まったもので教えるみたいなところがあるけれど、本当に教える力がないのは、自分の目で見て考える力です。気づいたことを聞いて言語化していくメモにして知識を積み重ねていく。そうやって一人ひとりの関心や感性を伸ばしていくのが教育です。なのに現実は、自分の外側にある数字やデータ、価値観を基準にしてしまって、それに翻弄されている。

西條 自分の内なる感性より外に基準を求めてしまいますよね。子育てこそ、本質でとらえたほうが、いろいろな悩みやとらわれから解放されるんじゃないでしょうか。私は大学院で発達心理学を研究していたんですが、博士論文のテーマは、「おかあさんと赤ちゃんの抱っこについて」だったんです。

高濱 おお、それは面白い。

西條 最初はね、世界で多いのは右抱きか左抱きかとか、横抱きか縦抱きかとか、それどうでもいいじやん的なこともけつこう調べたりするんですよ、これが。

高濱 論文の構成要素としては必要だと。学会の論文では左抱きが多いという説が主流でしたが、私の調べたタイでは右抱きが多くた。マダガスカルも。でも抱つこの本質はそんなことではなくて、親と赤ちゃんの相互作用、特におか



発達や成長のプロセスはおそろしく多様です 平均値通りの成長などありません

(西條)

たことは、発達や成長のプロセスはおそらく多様だということです。うつぶせが嫌いな子はいつまでたってもハイハイしないし、斜めにゴロゴロゴロと転がって動く子もいれば、床を上手に滑りなが移動する子もいる。みんな違いました。育児書によくあるような平均的な成長をする子なんて逆にいないんですね。多様性を前提にしないと発達理論は構築できません、本来は。

高濱 平均値の落とし穴ですね。ものすごくよくわかります。目の前にいる自分の子が現実で、平均値は幻想なのに、むろそっちのほうが気になってしまいます。

西條 いわゆる人間科学、社会科学といった学問のほうこそ実はまるで未発達な子が現実で、平均値は幻想なのに、むろそっちのほうが気になってしまいます。

高濱 生後何ヵ月ごろに何をしますっていう情報を参考にするんじゃなくて、自分の赤ちゃんを抱っこして関心を持つて見ていてあげればいいんですね。

西條 はい、その通りです。20組以上の親子の成長の様子をずっと観察していく、縦断研究というのですが、これでわかつますよね。子どもがあれ何? これ何? と

うんです。でも子どもに本当に必要なのは、そのおかあさんの期待をねのけて、自分の哲学を持つことだから。

西條 親の関心と子どもの関心を取り違えちゃうんですね。子どもの関心を尊重するのではなく、「あなたのためよ」と親の関心を押しつけちゃう。私は、一人ひとりの関心を大切にすることが、子育てや教育の本質だと思っています。

高濱 子どもの関心を尊重するために何か具体的なアドバイスはありますか。

西條 物心がついたら、子ども自身が自分の関心に沿って思い通りに育っていくことをサポートしていく方向に舵を切ったほうがいいと思います。子どもを信じて、子どもの関心に対応して「肯定ファースト」にしようと腹をくくることじやないでしょうか。

高濱 おかあさんは、家庭をマネジメントする要の存在です。ぜひ肯定ファーストの本質を腹に据えて、ドンとかまえて子育てをしてほしいですね。

西條 確かにそうですね。なめし革も目の当たりにしていたし、冷蔵庫を開けたら鳥やウサギが凍っていたとか、肉を食べたら残っていた散弾銃のかけらが入っていたとか笑)。そういうふうに生き物の死の上に成り立つていて生活というか。

平均値なんて気にするな 自分の関心を大切に育てよう(高濱)



対談を終えて

本質をとらえる
研究に期待!



幼稚園の入園式の日に母、兄、出た母の「とにかくやさしい人」

べての学問はもともと日常の問い合わせしたものですから。かたや「勉強」は、強いて勉めるつて書くでしょ。強いられるものではなく、自分の中から湧き出た問いを学んでいきたいですね。

高濱 西條さんも子育ての真っ最中なんですよ。

西條 5歳と1歳半の女の子の父です。まさに渦中の人間なんで、子育てつて、大変だよね……というのが実感ではあります(笑)。

高濱 西條さん自身はどういう子どもだったんですね。小学生のころは何になりたかったんでしょう。

西條 小学生のころは剥製屋になりたいって書いてました。うちの父、剥製屋だったんですよ。

高濱 なんと! ユニーケですね。

西條 これまで一度も同じ職業の人には会つたことないですよ。ハンターもしていま

ったのは、このころからです。

高濱 子育てこそ、物事の本質をとらえやすい場なのかもしれない。平均なんて氣にするな、本質を見抜け、と。

西條 「学問」って、問い合わせ書きますよね。子どもがあれ何? これ何? と

うんです。でも子どもに本当に必要なのは、そのおかあさんの期待をねのけて、自分の哲学を持つことだから。

西條 親の関心と子どもの関心を取り違えちゃうんですね。子どもの関心を尊重するのではなく、「あなたのためよ」と親の関心を押しつけちゃう。私は、一人ひとりの関心を大切にすることが、子育てや教育の本質だと思っています。

高濱 子どもの関心を尊重するために何葉は重い。エビデンスデータという名の数値に翻弄されて、本質を見抜くという肝心なことが置き去りにされていると痛感する。時代の救世主とも呼ぶべき西條さんの「見える日」がどう育つたのか知りたかったのだが、「剥製屋」には驚いた。大自然の中で獣のお供をするなど、今の大半の日本人にはできない。しかし、自然の美しさや死に直面し続ける経験は、凝視と諦観を与えたのである。